

なぜ、ワクチンが怖いのか——「危険情報」を信じるのにはワケがある

伊藤奈々恵・医療プレミア編集部

2024年11月29日毎日新聞伊藤奈々恵・医療プレミア編集部

10月に新型コロナウイルスワクチンの定期接種が始まり、SNS（ネット交流サービス）上では、ワクチンをめぐるさまざまな情報が飛び交っている。特に、新しいタイプの新型コロナワクチン「レプリコンワクチン」に対して不安を感じている人も多く、それに乗じて「亡くなった俳優はレプリコンワクチンを打っていた」というフェイクニュースも流れた。こうしたフェイクニュースはなぜ生まれるのか。防ぐ手立てはあるのか。そもそも、多くの人々がワクチンの安全性に疑心暗鬼になってしまうのはなぜなのか。科学記事のファクトチェック活動を2008年から続ける「食品安全情報ネットワーク」共同代表の唐木英明・東京大名誉教授に聞いた。

論理的でない私たち

——「俳優が亡くなる前にレプリコンワクチンを打っていた」というニセ情報がSNSで話題になりました。こうしたニセ情報が広まることを、どう思いますか。

◆我々人間の判断は決して論理的ではありません。論理的に考えればわかることでも、ほとんど感情的に、直感で判断をしてしまいます。それが我々の判断の仕方なのです。それが見事に表れています。

——なぜ、直感で判断してしまうのでしょうか。

◆そもそも「判断」は何のためにするのか？ それは、危険を逃れるためなんです。これはすべての動物に共通しています。目の前に危険があることを判断できなければ、その動物は死んでしまいます。だから一瞬で判断しなくてはならないのです。

論理的に考えるためには、時間がかかります。何時間も考えて結論を出そうとすれば、その間に殺されてしまうかもしれません。判断に時間をかけられないのです。だから、今までの知識と経験を総動員して、直感的に「これは危ない」「危なくない」と判断するわけです。

例えば、道を歩いているときに、誰かが曲がり角から出てきたとします。その瞬間、我々は非常にたくさんの方を判断します。男性か女性か、高齢者か子どもか。一番大事な判断は、危なそうな人か、そうではないのか。危険なものを持っていないか。普通の人なのか。我々は一瞬で見極めますが、それは決して「論理」ではないのです。今までの自分の知識と経験を基にして判断しています。

もし「危ない」という情報と「安全」という情報があった場合は、「危ない」という情報を信じた方が助かります。「安全」という情報を信じた結果、危険に出くわしてしまうかもしれませんが、「危険」という情報を信じて避けておけば、危険には出会いません。

そもそも動物の群れには危険を警告する見張り役がいますが、安全情報を出す役割はありません。人間は安全情報を出すことがあります。安全と危険の二つの情報があったら安全情報を無視して、危険情報を重視するようにできているのです。

危険情報は売れる

その結果、何が起こるか。危険情報は、売れるのです。危険情報を発信すると、SNSでたくさん「いいね」がもらえますし、ニュースは読まれます。危険情報の本は、たくさん売れます。その結果、世の中に流れる情報、ニュース、週刊誌の記事、出版物、あらゆる

ものが「危険情報」ばかりになってしまいます。例えば、食品添加物が危険だという本は、毎年何冊も出版されます。でも「添加物は安全だ」という本を書いてもほとんど売れません。こうして、「情報のアンバランス」が起こります。

さらに、我々は「みんなが言っていることを信じる」という性質をもっています。だから、周囲がみな「食品添加物は危ない」、あるいは「レプリコンワクチンは危ない」と言うような状況下では、自分だけそれに反対すると仲間はずれにされるのではないかと感じて、「そうですね、私も気をつけましょう」と、直感的に判断するのです。



ホームページ上で「レプリコンワクチン接種者はお断り」としていた理髪店の入り口には、ワクチンに反対する団体のチラシがはられていた=2024年10月13日午後3時12分、伊藤奈々恵撮影

人は目の前にあるものが「危険だ」と判断できる場合には、恐怖を感じて「逃げる」という行動をとります。しかし、よく知らないものが現れると、それが安全なのか危険なのか、すぐには判断できないこともあります。

例えば、「レプリコン」と言われても、すぐにはわかりません。あるいは「遺伝子組み換え」と言われてもわかりません。では、どうするのか。そういう時は「不安」を感じます。

不安というのは、我々にとって一番大きなストレスです。

だから、動物は「不安」を非常に単純な行為で解消しています。それは「不安＝危険」と判断することです。

私はよく山に行きますが、シカやサルなどの野生動物は、私の姿を遠くから見た途端にパッと逃げます。それは、私を危険だと思っているからではありません。安全か危険かわからないやつが来たから、逃げた方が安全と判断しているのです。

人間も同じです。「レプリコン」はよくわからない、「遺伝子組み換え」もよくわからない、「危険かもしれない、一応避けておこう」と判断します。

SNSなどで流れる危険情報が正しいのか、フェイクなのかを、我々はすぐには判断できません。でも、基本的に「危険情報を信じた方が安全」ですから、「とりあえず信じておこう」となります。

すると、何が起こるか。

危険情報の本はよく売れます。SNSでたくさんの人が読めば、広告料が入ります。するとビジネスの目的でフェイクを流す人が現れるようになります。

こうしたビジネスは、直感で判断をするという我々の性質、よくわからなくても危険情報はとりあえず信じるという性質を利用したものです。

ですから、フェイクニュースはなくなりません。どんどん増えています。

フェイクニュースを防ぐ四つの方法

——防ぐ手立てはあるのでしょうか。

◆いくつかあります。まず、**一つ目の方法は**、SNSのプラットフォームによる規制です。先日も、SNSで著名人のなりましに投資を呼びかけられ、お金をだまし取られた人たちが、フェイスブックなどを運営するメタを訴えたと報じられました。こうしたことが起こらないよう、SNSのプラットフォームが、フェイクニュースや詐欺的な広告を出さないように対策をとることです。

非常に厳しく規制している国もありますし、やっていない国もあります。私は厳しくすべきだと思いますが、その時に問題になるのが「言論の自由」「表現の自由」です。日本は「言論の自由をちゃんと守ろう」という世論が強く、かなりひどい情報発信も「言論の自由」と言われ、その延長で詐欺広告も見逃されています。

「他人を不幸にするものは、言論の自由ではない」という大原則を採用するか否かだと思いますが、日本ではSNSのプラットフォームの規制がまだ不十分です。

それでも、まずできる方法の一つが、この規制であり、今後の進展を見守りたいと思います。

2番目の方法はファクトチェックです。フェイクニュースが出てきたら、すぐに「これはうそです」というのをSNSなどで発信するのです。日本ではまだあまり盛んではありません。

アメリカでは新聞社が行っています。例えば、米国の大統領候補の演説に事実と異なる発言があると、その10分後15分後には「この発言のこの部分はうそだ」というニュースを流します。それぐらいのスピードで激しくチェックしています。非常に面白く、役にも立つので「有料でも見たい」という人も多く、ビジネスモデルとして成り立ちました。



米副大統領候補のテレビ討論会画面に表示されたQRコード。視聴者をファクトチェックのサイトに誘導する = 平野光芳撮影

ところが、それが成り立っているのは政治分野だけです。科学や健康、食品などの分野でファクトチェックをやっても、あまりニーズはありません。

例えば「レプリコンワクチンは大丈夫だよ」というニュースがあっても、読む人は少数です。危険情報であればチェックするけれど、「安全だ」というニュースは多くの場合、無視されます。だから、ファクトチェックがあまり読まれないのですが、それでも大事なことなので根気よく続けることが望まれます。

3番目の対策は教育です。リスク教育とリテラシー教育が必要です。小学生の時から、「リスクとは何だ」「安全ってなんだ」「情報ってなんだ」「SNSにはこんなにインチキがあるんだよ」ということをきちんと教えなければいけません。インチキな情報は一歩立ち止まって考えられるようにします。

しかし、今の大人はそんな教育はほとんど受けていません。だから、だまされやすく、振り込め詐欺の被害は大きくなるばかりです。こうした教育は重要ですが、成果が出るのは少し先になります。



小学校4年生のクラスで、「フェイクニュース」の授業を行う教諭（中央）＝フィンランド・ヘルシンキで2021年12月8日午前9時10分ごろ、岩佐淳士撮影

四つ目の手立ては、AI（人工知能）です。AI（ChatGPT、Gemini など）は世の中の多くのデータを勉強し、こちらが尋ねるとそのデータの中からエッセンスを取り出して教えてくれます。

最初のAIは、今ひとつでした。世の中のデータは多くが危険情報ですから、AIはそれを学習し要約して教えてくれました。言い方は悪いですが、世の中のバカな情報を集めて教えてくれる、バカなAIだったのです。しかし、AIは日々進化しています。そういう欠点も学習し、最近では「世の中ではこんなことが言われているけれど、科学的に正しいのはこちらですよ」と、教えてくれるようになってきました。

だからAIがさらに進化すれば、科学的な根拠に基づいた正しい答えを教えてくれるようになるはずで、近い将来、ファクトチェックのAI版ができるのではと期待しています。

今はまさに混乱の時代ですが、こうした対策の成果が出てきたら3年後、5年後には、今よりいい方に行くのではないかと考えています。

ワクチンが怖いのはなぜ

——近い将来には、フェイクニュースをめぐる状況が落ち着くだろうとのことですが、フェイクニュースが原因で、今必要なワクチン接種を受けない方もいらっしゃるのではと思います。

◆「ワクチンの悲劇」と呼ばれる話があります。

ワクチンを打つのは健康な人です。健康な人が感染症にならないためにワクチンを打ちますが、ワクチンには必ず副反応があります。

副反応が起これば、すぐわかります。接種を受けた後、熱が出た、頭が痛くなった、体

調がおかしくなった——。それは、ワクチンのせいだとわかるわけです。

一方、ワクチン接種を受けた人が感染症にかからなかったとします。しかし、罹患（りかん）しなかったのは、ワクチンのおかげかどうかはわかりません。接種を受けなくても、感染しない可能性もあるからです。ですから「ワクチンのおかげで感染しませんでした！」と断言できる人はいません。

このため、ワクチンに対する評判は、副反応が起こった人による「悲劇」の話ばかりになります。メディアも副反応が起きた人の声ばかりを取り上げるようになります。それを目にした人はきっと、「おそろしい」「こんなひどいワクチンはやめよう」と思うでしょう。

子宮頸（けい）がんを予防する HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンはまさにそうでした。ワクチン接種を受けた後に、体調を崩した方の様子は大々的にニュースで取り上げられました。でも、ワクチン接種を受けて、子宮頸がんにならなかった人は、「ワクチンのおかげだ！」とは言いません。長期間ワクチン接種が控えられ、日本では今も毎年約 3000 人の方が子宮頸がんて亡くなっています。

でも、「ワクチンの悲劇」をひっくり返す出来事が近年ありました。新型コロナの流行です。多くの人が「新型コロナ恐怖症」になりました。「絶対感染したくない」と思い、ワクチンの完成を待ちました。そしてワクチンが出てきました。恐怖感から逃れるために、だれもが先を争うようにワクチンを求めたのです。



7都府県に緊急事態宣言を発令した安倍晋三首相（当時）の記者会見を映し出すテレビ＝奈良市の東向商店街で2020年4月7日午後7時、加藤佑輔撮影

しかし、それから1年、2年たつと、新型コロナワクチンの副反応の話ばかりが出てくるようになりました。「新型コロナのワクチンは絶対打たない」という人も大勢いらっしゃいます。

ワクチンを待望する気持ちというのは、感染症に対する恐怖感が薄れたらすぐゼロになるのです。

——実施するのは問題だとは思いますが、「不安をあおれば、ワクチン接種が進む」ことになるでしょうか。

◆確かに、不安をあおれば接種を受ける人は増えるでしょう。しかし、ワクチンのために恐怖感をあおるといのは、やってはならないことです。

私は新型コロナでは、無用な恐怖感をあおり過ぎたと思っています。ニュース番組に専門家が毎日出演し、新型コロナの恐ろしさを訴えました。NHKのニュースのトップも、連日「本日の感染者数、死者数」でした。それだけやれば、誰もが恐怖を感じます。

なぜ、そうなったのか。当初は、新型コロナの治療薬もワクチンもありませんでした。打てる対策は、マスクや手洗い、うがい、外出自粛に営業自粛——。でも、国民にただ「自粛してください」と言っても、従わないでしょう。それで恐怖感をあおったのだと思います。しかしその効果は小さく、感染の波が定期的に発生して感染者が増える事態を防止することはできませんでした。

恐怖感をあおることは、非常に大きな社会的問題を引き起こしました。決して、繰り返してはならないことです。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、翌日から都立公園の駐車場や広場などが閉鎖されることになり、「立入禁止」と書かれたテープを張る公園の職員＝東京都の都立光が丘公園で2020年4月24日午後3時50分、滝川大貴撮影

間違いを認めない国、疑心暗鬼になる人々

——どうすればよいのでしょうか。

◆新型コロナの流行の時、欧米では徹底して「正しい情報」を国民に伝えました。情報

を出せば、間違ふこともたくさんあります。例えば、新型コロナの発生当初は、「8割の人が感染あるいはワクチンを接種して集団免疫が成り立てば流行は終わります。それまで頑張りましょう」と言われていました。でもそれは、間違いでした。そうすると彼らは「ごめんなさい。それは違いました。免疫は長続きしないので、集団免疫にはなりません」と、国民に伝えました。

また新型コロナは当初、マスクで感染を防げると考えられていました。飛沫（ひまつ）感染であれば、マスクで防げます。しかしその後、空気感染であるということがわかりました。通常のマスクでは完全には防げません。ですから、海外では「マスクをしても感染する」という情報が伝えられました。

こうして、情報がどんどん更新されていきました。こうした情報提供は、国民の判断を助けることになります。

日本はどうでしょう。日本は、情報が更新されません。当初言われていた「新型コロナは非常に怖い」「ワクチン接種を受ければ、もう大丈夫」「マスクをすれば感染しない」などということが、いまだに信じられています。

——新しい科学的知見が出てきたら、それまでの見解の間違いを認め、情報をアップデートするのが大事なのですね。

◆これは当たり前のことです。しかし、日本はそうになっていません。日本の政治や行政には、絶対に間違ふことはないという「無謬（むびゅう）性」というものがあります。たとえ間違っているでも「間違った」と言わないのです。

科学はどんどん更新されていきます。新しい事実が出てきたら、それまでとは違ふことが真実になるのは、当たり前のことです。常に情報をアップデートして伝えることが大事なのですが、それをやらない。

日本では、情報を更新する時は黙ってこっそりとしがちです。過ちを認めず、ごまかしながら、更新していきます。だから、言うことが変わるのです。

新型コロナのワクチンの目的は当初、「感染防止」とされていましたが、ワクチンさえ打てばコロナに感染しないと言われていましたが、事実ではありませんでした。それがうやむやのまま、今のワクチン接種の目的は「重症化防止」になっています。定期接種の対象者は65歳以上の高齢者などに限られていますが、感染防止が目的であったら、全員が接種を受けるべきですね。

「ごめんなさい。ワクチンを開発した時の新型コロナのウイルスと、ワクチンができた時に流行しているウイルスは全然違ふ型です。だから感染防止にはなりません。でも、重症化防止効果はあるんです」と説明すれば、国民も納得するのです。でも、接種の目的をいつの間にか「重症化防止」にして、間違っていたことの説明がないです。

——ワクチンに反対している方々も、こうした点を指摘されています。彼らが疑心暗鬼になるのは、こうした背景があつてのことなのですね。

◆そうなんです。彼らの主張には間違っている点も多いですが、「行政も専門家も政府も本当のことを言っていない」というのは、残念ながら事実です。

「安心＝安全＋信頼」という公式があります。国民が安心して暮らせるように安全を守るのが政治と行政の役割です。しかし信頼がなければ安心してもらえません。信頼を得るための三つの条件は、隠し事をしないこと、うそをつかないこと、そして責任を認めるこ

とです。今からでも遅くないので、国民に真実を伝えて信頼を得る存在になってほしいと思います。

<プロフィール>

からき・ひであき 1964年、東京大農学部卒。農学博士、獣医師。米テキサス大ダラス医学研究所研究員、東京大教授、倉敷芸術科学大学長などを歴任。著書に「フェイクを見抜く『危険』情報の読み解き方」（共著・ウェッジ）、「健康食品入門」（日本食糧新聞社）、「証言 BSE 問題の真実」（さきたま出版会）など。専門は、薬理学、毒性学、食品安全。